

第7節 まとめ

携帯電話の利用状況 回答者の92%が携帯電話を利用していた。視覚的な文字の読み書きの可否による利用率の大きな差はなかった。一方、年代が上がるほど利用率が下がる傾向が見られた。多くの回答者が、大きな文字や音声読み上げ機能付きの中高齢者向け機種を使っており、その利用率は7割を超えた。視覚的な文字の読み書きができないと答えた人のほとんど、できると答えた人の半分弱が音声読み上げ機能を利用していた。文字サイズの拡大は、視覚的な文字の読み書きができると答えた人の半分強が利用していた。携帯電話利用者のほとんどが通話を利用するが、毎日利用する割合は通話より電子メールの方が高かった。視覚的な文字の読み書きができないと答えた人の方が電子メールとインターネットの利用率は低かった。また、これらの利用率は年代が上がるほど下がった。携帯電話への要望として、視覚障害者に便利な様々な機能の搭載、スクリーンリーダ並みの読み上げ機能の実現、GPS機能の搭載、音声読み上げや文字の拡大等で利用できる機種／通信会社が増えることなどが挙げられた。

パソコンの利用状況 回答者の約95%がパソコンを利用していた。視覚的な文字の読み書きの可否と年代による利用率の大きな差は見られなかった。スクリーンリーダの利用率はパソコン利用者の約85%と高かった。視覚的な文字の読み書きができないと答えた人で約95%、できると答えた人でも約60%がスクリーンリーダを利用していた。画面拡大ソフトの利用率はユーザー補助の約4分の1であった(3.8% vs. 15.1%)。周辺機器・アプリケーションソフトの利用率と、利用者の多い製品について、2002年の調査結果と大きな差異はなかった。ただし、点字電子手帳の利用率の伸びが見られた。電子メール、OCR、点字編集、自動点訳の各ソフトは、視覚的な文字の読み書きができないと答えた人の方が利用率が高かった。パソコン利用上の問題点として、音声対応の不十分さ、スクリーンリーダ／アプリケーションソフト／基本ソフトのフリーズ、画面の見づらさが多くの人から指摘された。

インターネットの利用状況 視覚的な文字の読み書きの可否、年代を問わず、パソコン利用者のほとんどがインターネットを利用していた。利用頻度は、視覚的な文字の読み書きができないと答えた人の方が高かった。20代～60代の間では80%以上の人が週に4、5日以上利用していた。閲覧ソフトでは、ホームページ・リーダーとPC-Talkerの利用者が多く、複数のソフトを利用する人は全体の40.1%に上った。情報収集、電子メールを利用目的とする人が多いが、30代を中心にオンラインショッピングや情報発信も多かった。閲覧内容は、10代～50代で趣味の情報収集が多いが、30代、50代で生活実用上の情報収集、60代でニュース等の提供ページの閲覧が多いのが特徴的であった。利用時の課題として、視覚的に文字を利用する人では、文字サイズ、ユーザエージェント、ページレイアウト・構造に関する課題、視覚的に文字を利用しない人では、代替テキスト、動的なコンテンツ、ナビゲーションに関する課題が多いという傾向が見られた。